

伏流水 | JCP の人材養成「立体文化財修理技術者 野中昭美さんへのインタビュー」

特 集 | JCP✈長崎スタディツアー開催報告

特定非営利活動法人
文化財保存支援機構
季刊誌



NPO JCP NEWS

31

2016.7.15

軍艦島の見学を終え、チャーター船で長崎へ戻る



JCP の平成 28 年度定例総会は 6 月 18 日（土）、東京国立博物館の小講堂にて行われました。議案審議後は、登録会員の土師広氏より「陸前高田市立博物館所蔵 油彩画の修理について」の報告がありました。その後 JCP で受託している被災した資料の修復について、JCP が専門家集団としてどのように関わるか議論がありました。

総会後は当機構の三輪嘉六理事長が、平成 28 年春の叙勲において「瑞宝中綬章」を受章されたことを受け、理事長を囲んでお祝いの会を催しました。集まって下さった会員の皆様と共に、「文化財の保存」に長年に渡って尽力された三輪理事長を労いました。

皆様の大切な会費に支えられて運営されている組織です。一人でも多くの方にご来場いただき、活動内容を知っていただければ幸いです。

開催日時：平成 28 年 6 月 18 日（土） 13:30 ～ 16:00

会 場：東京国立博物館 平成館小講堂

（〒 110-8712 東京都台東区上野公園 13-9）

出席者：理事：5 名、維持会員：2 名、委任状：7 名
本部事務局：3 名

議事次第

理事・維持会員 15 名うち、委任状含め 14 名出席。定款 25 条に基づき総会は成立。次に三輪理事長が議長に選出された。

議案 1. 平成 27 年度決算報告／事業報告

平成 27 年度決算報告は下記のとおり。

【収入】

・一般会計収入計 (会費、寄付等)	¥ 5,923,265
・事業収入計 (事業については、別紙事業報告をご参照下さい)	¥ 52,372,427
当期収入計	¥ 58,295,692

【支出】

・一般会計支出計 (家賃、人件費、旅費、通信費、消耗品費など)	¥ 19,097,915
・事業支出計	¥ 41,147,770
当期支出計	¥ 60,245,685

当期収支差額	▲ ¥ 1,949,993
--------	---------------

※なお、震災寄付金特別会計について、平成 27 年度は個人様より合計 57,000 円のご寄付をいただきました。前年度繰越金と合わせ、3 月 31 日時点で **88,120 円** の残高となっております。27 年度においては関西支部による東北震災被災資料救援活動に対して使用させて頂きました。



議案 2. 平成 28 年度事業計画

＜東京本部＞

- ・文化庁補助事業「(略称) 大津波プロジェクト」への協力
- ・文化財保存修復専門家養成実践セミナー：《レベル IB》(8/29 ～ 9/8)／文化財危機管理セミナー《レベル II》(8/4 ～ 8/10)
- ・東日本大震災被災文化財救援事業

民具の実測図作成、美術資料・書・地籍図の安定化処理、絵図資料調査を受託

- ・世界遺産スタディーツアー（企画中）
- ・ニュースレター発行、例会開催など
- ・文化財保存修復学会事務局運営協力

＜関西支部＞

- ・文化財 ER
- ・田川市山本作兵衛コレクションレプリカ作成
- ・京都府庁行政文書修復支援
- ・天草キリシタン館 伝大浦天主堂関係ガラス保存処置事業

議案 3. 平成 28 年熊本地震への対応について

九州支部の本田光子理事より熊本地震における文化財の被災及びレスキューの状況について報告があった。JCP では 5 月より熊本地震のための募金を呼びかけており、今後の活動は九州支部の指示を待ち、行うこととなった。

議案 4. 会員の動向

平成 27 年度の新規入会者は 45 件にのぼったが、会費滞納による退会処理を厳正に行ったため、全体としては減少した。加えてセミナー受講生の動向について説明があった。

議案 5. NPOJCP の文化財レスキュー派遣事業について

東日本大震災以後、JCP の活動内訳において文化財レスキュー事業は大きな割合を占めている。特に JCP には適正な人材派遣の調整能力が求められており、これまでの実績を報告した。以上。

平成 28 年熊本地震 NPOJCP 被災文化財救援募金 ご協力をお願い

平成 28 年 4 月 14 日以降、熊本県と大分県で相次いで発生している地震により被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。

この地震で損壊するなどした、国や県、市町村指定、登録の文化財が九州で少なくとも 361 件に上ることが分かっています（5 月 10 日時点、共同通信調べ）。

平成 28 年度 JCP 定例総会において、熊本地震における文化財の被災およびレスキューの状況について、本田光子理事より報告がありました。「文化財の被害状況は、指定のものについてもまだ調査を行っている段階である。長引く余震により、被害の拡大や調査の遅れが心配される。現地の大学関係者により急遽設立された史料ネットや博物館美術館職員が民間資料の救出を行っているが、行政による被害調査と同様にさらなる県外からのマンパワーが望まれている。」とのことでした。

また文化庁より「熊本地震による被災文化財に対する取組について」の報道発表があり（平成 28 年 6 月 20 日）、その中で熊本県被災文化財救援事業の対策本部が九州国立博物館に置かれ、同博物館と国立文化財機構防災ネットワーク推進室がその任にあたることが決定されました。

NPO JCP でも要請があればすぐに適切な救援活動を行えるよう、九州支部を中心に準備を整えているところです。「平成 28 年度熊本地震 JCP 被災文化財救援募金」へのご協力をお願い申し上げます。

・みずほ銀行 根津支店 普通預金 1091862
名義：特定非営利活動法人 文化財保存支援機構
・郵便振替口座 00120-4-10545
名義 NPO JCP

6 月 18 日までに 414,000 円の寄付を賜りました。心より御礼申し上げます。お寄せいただいたご厚意は、九州の文化財ならびに文化復興のため、最大限生かしていく所存です。

案内

平成 28 年度文化財保存修復養成実践セミナー 受講生募集

本セミナーはレベルⅠ、Ⅱにそれぞれ AB コースを設けた 4 年制のプログラム構成で行ってまいりましたが、今年度をもって一度終了する予定です。来年度からは新たなプログラムで学びの場を提供できればと思っております。プログラム改変につきまして、これまでレベルⅡとして行ってきたセミナーは「文化財の危機管理セミナー」という名称とし、参加資格もレベルⅠ修了に関わらず受講が可能になっております。ご不明点や質問などありましたら、事務局までお問い合わせ下さい。

また、過去のセミナーに参加された皆さまが会せる場を設け、受講生相互の親睦交流を図ることを目的に「セミナー受講生の会」を 9 月〇日に開催します。

①「文化財保存修復専門家養成セミナー・レベルⅠB」

- ・日 程 : 8 月 29 日（月）から 9 月 8 日（木）（9 月 3 日を除く）の 10 日間
- ・会 場 : 東京国立博物館 平成館 小講堂ほか（東京都）
- ・参加資格 : ・文化財の保存修復に興味を持ち真剣に学ぶ意欲のある者
（授業のレベルは大学等で行われる文化財コース履修者向けです）

②「文化財の危機管理セミナー（文化財保存修復専門家養成セミナー・レベルⅡ）」

- ・日 程 : 8 月 4 日（木）～ 8 月 10 日（水）の 7 日間
- ・会 場 : 東北芸術工科大学ほか（山形県）
- ・参加資格 : ・震災被災地域の文化財従事者（東日本大震災・熊本地震）
・現役の文化財保存修復専門家
・大学等で文化財コースを履修中、あるいは卒業した者（専門家を目指す者）

詳しくは「文化財保存修復専門家養成セミナー」専用 HP まで <http://npojcp.wix.com/seminar>



2015 年度を締めくくる JCP 世界遺産スタディツアーの舞台は長崎。昨年 7 月に世界遺産に登録された端島（軍艦島）をはじめ、これから世界遺産登録を目指す五島の教会群を巡りました。3 月 19 日から 22 日の 3 泊 4 日、参加者は過去最高の 27 名、講師 1 名事務局 2 名を含めて総勢 30 名で長崎の海を縦横に堪能するツアーとなりました。

1 日目 長崎市内

長崎に到着した 19 日は生憎の天候で、当初の軍艦島見学は 2 日目に繰り越され、午後は長崎市内で自由行動となりました。

会員で長崎在住の油彩画修復家 竹ノ下磨須子さんのご好意により、勤務先である長崎県美術館の見学プランが実現し、学芸員の森園先生にもご協力いただいて、保存修復室と展示室を案内して頂きました。

美術館には、第二次大戦中特命全権公使としてスペインに赴任した須磨彌吉郎のコレクションが多く収蔵されています。修復室の歴史も須磨がスペインで収集した油彩画を修復するところから始まり、現在は竹ノ下さんを含めて 2 名の体制で主に油彩画を修復し、掛軸類は外部委託をしているとのことでした。

美術館は長崎の出島の先に位置し、運河を跨って美術館棟とギャラリー棟があります。隈研吾設計のガラスが多用された外観は非常に開放感があり、長崎県産である波佐見焼の陶板を 280 枚用いたという照明は圧巻です。展示室も空調を床に設置したり、移動式の展示ケースを多用したりと工夫が凝らされています。保管庫には免震構造が施されているとの説明があり、今回の地震でも被害は出ていないとのことでした。

オプションで夕食に訪れた料亭『花月』は江戸時代の創業で長崎県指定史跡でもあります。長崎名物卓袱料理に舌鼓を打った後、料亭内をご案内頂きました。



長崎県美術館のバックヤード見学をする参加者
右から二人目が森園先生、段上に竹ノ下磨須子さん。



料亭『花月』と
卓袱料理



旧五輪教会

2 日目 軍艦島・福江島

軍艦島日和の晴天となり、瀬渡し船で向かいます。

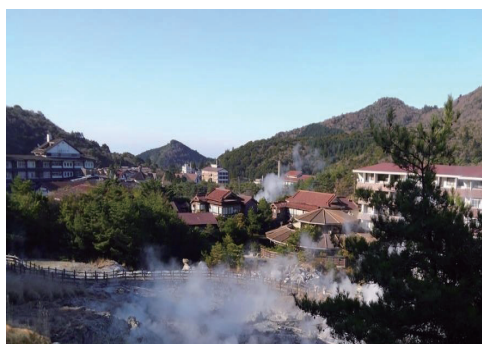
軍艦島の愛称で親しまれる端島は、2015年に「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業」の構成遺産として世界文化遺産に登録されました。今回は長崎市世界遺産推進室の特別な計らいにより、通常の観光では立ち入れない島の内部までご案内頂きました。

前日のうちに五島列島の福江島に渡り、「水の浦教会」、「堂島教会」を訪れました。

3 日目 五島列島の教会群

水上タクシーにて久賀島「旧五輪教会」(国宝)と奈留島「江上天主堂」(重文)を回りました。

ご自身もキリスト教徒である地元のガイドさんに苦勞されたご先祖様の話をお伺いし、苛烈なキリシタンの歴史に改めて思いを馳せました。



島原・武家屋敷



江上天主堂前で記念撮影

4 日目 雲仙・島原

前日のうちに雲仙に向い温泉旅館で懇親会、最終日はバスで島原にて自由行動でした。

熊本城を見たいと、ここで分かれて熊本へ向かわれた参加者がいらっしゃいましたが、今考えると熊本城の勇姿を見られた最後のチャンスだったかもしれません。

早く地震が落ち着いて、熊本城の復旧に取り組める日が来ることを祈るばかりです。

上記ツアーのフォトギャラリーを、特設サイト <http://npojcp.wix.com/nagasaki2015> で公開しています。紙面では掲載しきれない写真を多数紹介しております。是非ご覧ください。



法參上!

崩れたる軍艦島の廃墟には青き草々風に震える

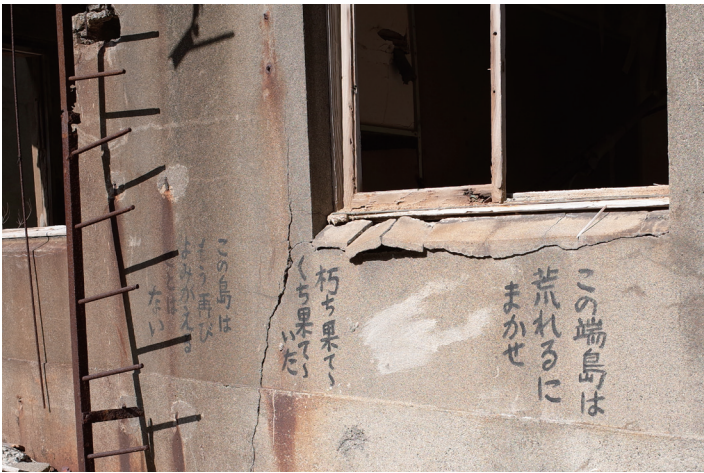
遠く見る端島の影は音に聞く軍艦島とよくぞ名付けたり

ヘルメット被ってくぐる廃墟なり錆びた土台の鉄筋あわれ

荒れ果てし中学校の校庭にただ海風の唸り耳打つ

アルカリのコンクリートは鉄筋の酸化防ぐも海には勝てず

おかだ おさみ
岡田 修身 (参加者)



見学は端島小中学校からスタート



鉱員住宅



端島神社



貯炭ベルトコンベアー

軍艦島と五島列島教会群を巡る長崎世界遺産スタディーツアーに参加して

ひがき ちさ
檜垣 知沙

(東京学芸大学文化財科学専攻)

今回のツアーは、「軍艦島に行つてみたい」という軽い気持ちで参加しました。学生が一人しか参加していないということで最初は不安になりましたが、そんな不安が吹き飛ばほど楽しく、また勉強になる時間を過ごすことができました。

やはり、ツアーの中で一番印象に残ったのは2日目に訪れた端島でした。前日は風が強く見学が中止になりましたが、天候にも恵まれ行きは船もさほど揺れず、青空の下でその軍艦のようなシルエットが見えたときは本当に来たのだと何とも言えない気持ちになったのを覚えています。端島では、通常の見学者用のコンクリートで舗装された見学通路ではなく島を一周するというとても貴重な体験をさせていただきました。そのため炭鉱の生産設備だけでなく、居住設備など実際に人が生活していた空間を見ることができました。特に最上部の旧端島神社から眺めた景色は素晴らしいかったです。事前に講演会で

端島のことを勉強したりはしていましたが、実際に中を歩いてみると島中瓦礫だらけであり、最上階部分が崩れていたり、鉄骨部分が壁から突き出たり、基礎部分が流れ出されていたりと劣化が激しく端島の環境の厳しさと保全の難しさを実感しました。見学途中で実験を行っている様子や補強を行っている様子を見ましたが、これからのような方針で保全が行われていくのが気になるところです。

ツアーの中で一番勉強になったのは、長崎県立美術館のバックヤード見学です。美術館のバックヤードに実際に入り搬入口や作品の運搬通路や保存修復室を見て、学芸員の方の話聞くことができました。私は学芸員資格の取得を目指しているので、特に実際に展示室で展示室の環境や、展示を作るうえで苦労した話などただ見ているだけではわからないような、現場の話聞くことができとても勉強になりました。

料亭「花月」は、正直なところ学生にとっては安い値段ではなく、行くかどうか最後まで迷っていましたが行ってよかったです。入口から思わず写真を撮りたくなってしまったような雰囲気があり、食事前には料亭が所蔵している美術品を見せていただきました。卓袱料理もとてもおいしかったです。食後は竜馬の刀傷と云われている傷と日本初と言われている洋室を見せていただきました。

今回のツアーでは、料亭「花月」をはじめ、端島、五島列島の教会巡りなど決して一人旅では訪れることのないような、また行くことのできない場所に行くことができ参加してよかったです。一人で参加ということでは気がかけてくださり、さらには人生相談にも乗っていただき、本当にお世話になりました。おかげでも楽しい時間を過ごすことができました。今回の体験をこれからの勉強、進路に活かせるよう頑張ります。ありがとうございました。



参加者・阿久井 由美

人生や歴史上の時間軸でも自分が今いる位置や転機を認識できる場所は少ない。長崎県は、日本人にとってそんな場所ではないだろうか。古代から現代まで時代を超えて海外と接し、地名や特産・技術に外国語が残り、過去を証明する史跡群や伝承が息づく時間・空間の転換点。今回、10年ぶりに訪れ、ガイドの方々による生活史や裏話などの談話に触れることができ、印象深い旅となった。各所で史跡や文化財の保全に携わる専門家の好解説を受け、オプションや自主見学まで、旅程の全てが勉強になった。島原の宿泊先では普賢岳災害時に長期避難所だったと伺ったが、その二週間後の4月、対岸の熊本で起きた地震の報に接し、災害列島という日本の特質を実感した。また、最近見たバーミアン遺跡のデータ復元の展示と熊本城跡の災禍を重ね合わせ、記録保存の有効性についても考える機会となった。

私事だが筆者の父が端島建築実測研究をしていた縁で、学生時代まで閉山後の端島へ同行し、高島や県内・五島を繰り返し訪れた。毎日護岸に大勢上陸する漁師で賑わう無人島の真新しい遺跡を無意識に一人で歩いていた。子供時代当時は無の境地だったが、当時の各空間の記憶は体感的に蘇る。今、端島を歩くと、生きていた廃墟群が視覚的に訴えかけてきた。現在の荒れた空虚な明るさに涙が出そうになる。今回、20代での訪問を最後に立入禁止となった島に、約25年ぶりに島頂に至る上陸が叶い、関係者の御尽力に心から感謝したい。

古モノ好きから近代化遺産オタクになり、既存空間が再生出来ればと保存修復再生学に興味を持ち、結果的に進学時にも影響を受け、今に至った。一建築学生

として何はともあれ実測していた80年代。今思えば、屋外の物証たちに接した実地体験は、学校と異なる自己確認の場になった。一方で、政商グラバーの一拠点だった高島は長崎市に編入され、中腹を埋めた団地群は更地となり、近代文明の後退を体現する風景に変わった。

東日本大震災後の現在に似てエネルギー政策の転換による閉山が相次いだ70年代、公団と同じ姿をしたRC建築の社宅群は、偶然にも低成長期を経て、海底炭鉱と共に、放置という形式をとってサバイバルできたようにも思える。当時、外国の著作等を通じ、建築家なしの建築という概念と既存空間の意匠的調査が認知された。端島も、斜面利用の集落跡として実測調査がなされた。日本の産業革命時代の物証である他、建築史上は炭鉱技術の応用が特筆的である。次第に近代化遺産の産業考古学的価値が上がり、好況による文化財衰亡期には街並み文化財的な価値は与えられなかったが、バブル期以降、観光資源として光が当てられた。旧島民のふるさと意識による市民運動を端緒に、世界遺産への紆余曲折が始まる。

端島神社から一望すると、史跡になった島は文字通り風前の灯だった。RC基礎部分では市の技術者の方が計測作業中だった。実際、沿岸部ではアマカワ（伝統的石垣、語源は一説に@Macao）など地場構法の護岸や基礎杭が露出し、人工地盤は崩壊途上である。島の景観が根本から失われる危機に瀕し、現実的課題として実物保存の可否を探る模索は当然であろう。しかしながら、島内の廃墟は、工学的な経年見本を併せ持つ技術史上の実験場としても存在している。一般には保存の可否や復元の可否についての議論は少ない気がする。

一般に、古いモノは、古びても壊れても、文字通り



過去を物語る。文化的景観のみならず、文明の昔を今に呈し、過去を実物として表す生き証人としての使命が残されている。近代化遺産においては、産業地帯の中核に遺された現存する遺構の陰に隠れがちな周囲の史実を知らせる役割もある。富岡や端島など古代に及ぶ地場産業史を代表する世界遺産のみが注目される例も多い。グローバルな情報共有が日進月歩する昨今、著名な事例に目を向けがちだが、観光主導による文化遺産の形骸化も気になる。技術史の実験場としての在り方と観光資源としての共存は可能だろうか。都市遺産としての課題については文化財の周辺を含めた価値保全の在り方全体を議論の俎上に上げ、史跡や文化財の背景を見失わず、地域や社会全体を複眼的に認識する必要があるように思われる。工学、文化財学、社会学、史学、美学、経営学、行政や市民など多方面から、保全の方向性まで遡った議論が深まるように願う。

文化財危機の多くが天災・戦災といわれるが、保存が難しいケースは多い。重層的な視点で掘り起こす際に手掛りとなる地域資産が日本では高度成長期からバブル期にかけ自ら葬られた。やむを得ない天災による喪失は今も続く。しかし、時勢に晒されるままではどんな宝も埋もれて行く。保全が理想ではあるが、叶わない場合どうするか。

現存当時の形態として保護しきれない状況における一方向性として、「記録」は大きな力になるように思う。個人的体験上も、身近な未認の歴史的遺構の解体に接し、記録保存の重要性を示唆された。昨今の技術進歩により、科学的分析や工法の実現可能性が増し、戦災などで崩壊した文化遺産のデジタル再現が実現した。3次元データ計測により記録応用方法の多様化も期待

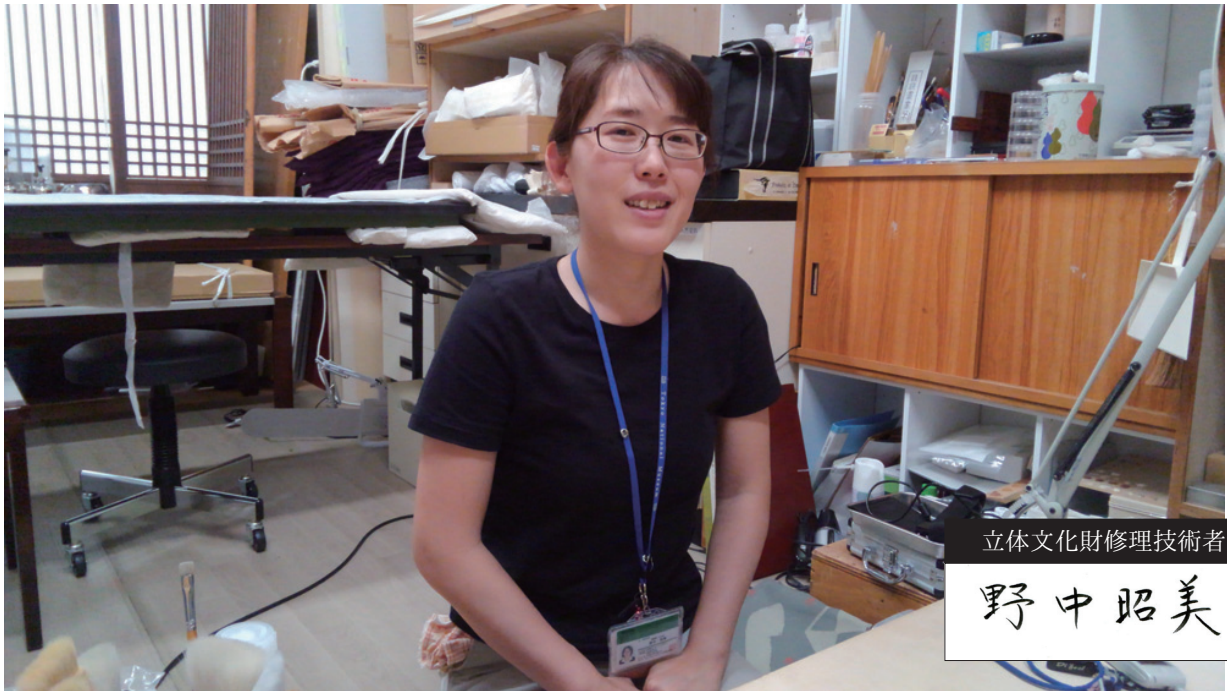
される。復元（一般社会には復旧を図る意図に比して真正性を求める論議が比較的少ないことは気になるが）の際にも、有効な手掛かりになるのではないか。災害大国として、崩壊を含めた喪失を前提として記録保存を指向し、意図的に今現在から実録としてデータを残すことで、物証が危うくなったとしても、少しでも価値喪失を補填できないだろうか。

保全の手段の充実と同時に、リスク管理も問われる。真正性の確保、文化財的価値を損なわない保存手法・維持方法の継続、伝統技術者の育成、知財の担保、運営による財務基盤安定化、観光による負担からの保護など、現代的な新出課題もある。例えば、数年前より受講したJCPの一連の文化財研修の際、業務上で経験している建設業界で確立されつつあるファシリティマネジメント（FM）の概念は、文化財保全との共通項が多いと感じた。FMは建設分野に経営学を応用したライフサイクル重視の施設運営実務手法であるが、文化財を既存の建造物と捉えた場合には方法論として一致しないだろうか……。加えて、文化財的価値を損なわずに史的物証として補完するには？

天災・人災や紛争の世紀において具体的にどうしたら過去を未来に伝えられるのか。遥かに熊本城を望む島原城跡に再建されたRC造の博物館から普賢岳を見上げた。何もできていない自分だが……。今回の旅を機に、「後の祭り」にせずに、文化を残し将来へ伝える具体策」を考えたい。

それにしてもニュース映像に驚愕する日々。前に増して混迷を深める地球上で、人智を未来に手渡すことは本当にできるものだろうか？

（スタディーツアー 2016 参加者、JCP 会員・(株)日建設計）



立体文化財修理技術者

野中昭美

1. 文化財修復の世界をめざすまで

高校時代の野中さんは、理系進学校に通うソフトボール好き、美術好きの女子高生だったそうです。手先を動かすことは好きではありましたが、将来的なことを考えると美術系大学に進むという選択肢はなかったようです。理系大学に進んで大好きなソフトボールを続けたいと漠然と考えていた彼女にとって、部活のコーチが強豪校に引き抜かれたことは大きなショックでした。揺れ動く中で受けた第一次センター試験に無事パスしたものの、「何か違うな」と感じ、大学の案内書をめくっていたところ、目に留まったのが東北芸術工科大学の芸術学部文化財保存科学コース古典彫刻修復研究室でした。実は野中さんのお祖父さんは建具職人、叔父さんは宮大工というDNA、しかも信仰熱心だったお祖母さんの影響で、昭美さんは小さい頃から近所のお寺の開眼法要などに連れて行かれ、仏像修復のイメージも縁遠いものではなかったそうです。

「これだ!」彼女の中で様々なベクトルが、ぴったりと照準を合わせた瞬間でした。すぐに決断した彼女は、第一次センター試験をパスしていたにもかかわらず、一浪して東北芸術工科大学に入学するのです。それが、野中昭美という文化財修復家の歩みの始まりでした。

野中さんが大学で教えを受けたのは、古典彫刻の修復家牧野隆夫先生です。学部2年のとき、大学に博物館で展示するための神像模刻の依頼がありました。先生はあまり乗り気ではなかったのですが、その神像を所有する神社がたまたま野中さんの実家がある岩手県八幡平市（旧安代町）であったことから、野中さんが模刻を担当することになりました。模刻をしてみると、一見大した価値はないと思われていたこの神像が、実は全国でも他に例を見ない造形で、他の土地にない価値があることが分かりました。この経験を通じ、彼女は地域に存在する文化遺産の大切さに目を開かれたのです。振り返ってみれば、教科書に掲載されていたのは奈良京都の仏像ばかり。野中さん自身地元のものはよく知りませんでした。卒業後の進路として国指定の仏像彫刻の修復を手がける（公財）日本美術院の就職試験も考えていましたが、このことに矛盾を感じた野中さんは、大学院へと進み、保存修復の専門の視点から学校教育／社会教育の現場で、文化財を再発見するための模刻作品の提案と展示活用について研究する道を選びました。

「作品の後ろに、制作した人や守ってきた人、修復してきた人たちの存在があることを知った。」と、彼女は言います。ものの背景にある人の存在を伝えることも、

文化財保存修復の世界に生きる若い力を追う「伏流水」シリーズでは、前号 No.30 から、JCP が主催した「文化財保存修復専門家養成実践セミナー」修了生のその後を追っています。今回は、同セミナーの第一期生であり、現在東京国立博物館のアソシエイトフェローとして活躍している立体文化財修理技術者 野中昭美（のなか てるみ）さんにお話を伺いました。



平成 26 年度「陸前高田学校」（文化財保存修復セミナー・レベルⅡ）に「東日本大震災に在住勤の文化財保存従事者」として参加された時の様子



文化財を守る人の原動力になる——これは、それから後現在まで変わらない、野中昭美さんの生きる姿勢となっています。

Ⅱ．文化財修復家として

Ⅱ -1. 茨の道

大学院修了後、野中さんが直面したのは茨の道でした。東京藝術大学大学院の博士課程を目指すも、制作に軸足を置く同大学院には受け入れられず、失意の中、縁あって浄法寺漆と歴史的に繋がりのある地元岩手県の漆工技術研究センターで2年間の研修を受けます※。その後、母校の文化財保存修復研究センター新設を機に、研究補助として山形へ戻りました。この間恩師牧野先生の工房で働かせてもらったり、同大学の藤原徹教授の工房設立に参加したりしましたが、奨学金の返済を続ける身にはいずれも厳しく、体調を崩し、3年後、再び実家に戻るようになってしまいました。そこで1年間休養し、地域の博物館で嘱託勤務などをしたものの、ついに文化財業界から離れることを決意するのです。そして就職活動の結果、地元の木造建築会社に内装デザイン部門で正社員として採用されることになりました。その時は、真剣に木造建築の勉強を始めようと、

参考書をたくさん読み込んでいたそうです。

ところが、運命の皮肉と言うべきか、またもや同時期に受けていたもりおか歴史文化館から合格通知が届き、悩んだ結果、結局建築会社を断念するのです。高い安定性、世間並み以上の給与、おしゃれなオフィス、しかも社長は野中さんを気に入っている・・・普通であれば断然建築会社を選ぶところです。「建築会社を選んだら、もう文化財保存の業界に戻ることはないのだな・・・と思ったら、今までの苦労は何だったのか、空虚な気持ちになった。」

これで3度、野中さんは自ら茨の道を選んだのです。

Ⅱ -2. 博物館の中で

もりおか歴史文化館は、(株)乃村工藝社が指定管理者として盛岡市から運営を委託されている博物館で、当時は2011年7月のオープンを目指して準備中でした。文化財保存を専門とし美術担当として学芸員となった野中さんは、展示や建物の美観を優先する周りの理解と協力を得るために苦労を重ねました。就職早々発生した東日本大震災がそれに拍車を掛けました。ただ、展示のプロである同社が仕掛ける展覧会は、エンターテインメント性に富んでいて「楽しかった」と野中さんはいいます。野中さんの働きぶりは徐々に認められ、4年目で社内賞である「部長賞」を受賞するに至ります。

そんな中、「東京国立博物館のアソシエイトフェローの試験を受けないか？」という声がかかったのです。

Ⅲ．現在、そして未来へ

（佐々木）東京国立博物館に来て、一番今までと違うと感じたことは何ですか？

野中さん）予算規模も莫大で、最先端の情報もある。でも、規模が大きい分、必要なところに人員が補充されるとは限らない。実際、修復技術者のAFとしては、装こう2名、立体1名のみ。しかも立体分野の技術者が採用されたのは初めてでした。保存修復課の先生方からは期待を寄せて頂いていたと思いますが、研究員の先生たちからは少々不安な目で見られていたことも事実です。ですから、1年目の昨年は各分野の研究員の信用を得られるよう努力し、徐々に安心して仕事を出してもらえるようになってきました。少し処置をしてあげれば十分展示に耐えられる作品や資料がいっぱいあっても、最初は信頼してもらえなければ仕事が降りて来ませんでした。そのため、声を掛けられたらできるだけ断ることなく、今までの人脈と経験を活かし、一つ一つの仕事を可能にするための工夫をしています。地元での漆工の研修や近現代の彫刻修復の先生の仕事のお手伝いをさせていただいたこと、学芸員経験などが、今になってとても役に立っています。

AFとしては、頼まれるまで何もしないという選択もあるいは可能なかもしれません。しかし野中さんの選択肢にそれはありません。修理作業と並行して、今の立場で新たに学んだ様々な分野の修理の方法や状況を記録、蓄積するようにしています。また、少しでも状況を変える方法はないかと日々工夫、模索しています。なぜなら、「私の次の人材のため」と言うのです。AFの制度は現行3年任期。延長できても5年が限度です。そのため、次に来た人も同じレベルで仕事が継続できるよう、記録を作っておく重要性を感じているそうです。最長でも5年の任期のあと、野中さんは再び身の振り方を考えればなりません。それなのに次の世代のことを考えるという姿勢には、本当に頭が下がります。

今、野中さんにはひとつの思いがあります。文化財関連学科を持つ大学、インターン制度を持つ博物館や研究所は育てた人材をその後どう活かすのか？専門職としてのビジョンを持つべきだと言うのです。例えば各大学等のカリキュラムは各々が創意工夫したもので、

一定の基準がなく、卒業した学生がどのような知識を習得しているのか、何ができるのか？受け入れ側がイメージすることが難しくなっています。この指摘は、JCPのセミナーも免れるものではなく、反省、改善すべき点だと思います。「何のために」「どのような人材を」「社会のためにどう活かしたくて」カリキュラムや研修制度を構築しているのか？

「常勤の保存修復担当官を置けない日本の博物館は遅れている」という声はよく耳にしますし、実際そうなのだろうと思います。ではそこを改善するためには、どのような立場の人がどのように働きかけたらいいのでしょうか？

答えは簡単ではありません。ひとつ言えることは、この業界にいる人たちが他人事と思わず、少しずつでもできることを考え、アクションを起こしていくことだと思います。そうでなければ、大学等の文化財関連学科縮小の傾向は、今後益々加速していくことでしょう。

さて、5年後、野中さんはどんな選択をしているのでしょうか？

「修理をしていると作品の後ろに人の存在を感じる。」「作品の作り手、直してきた人の思いを追体験できる。」「地域や人と作品をつなぐ～それこそが美術史家にも作家にもできない修復家の役割と考えている」と、話す野中さん。どんなに困難でも、誠実にぶれない軸を持って、野中さんは今後も文化財と向き合っていくに違いありません。

今回は、どうもありがとうございました。

（佐々木、文責：八木三香）

野中 昭美（のなか てるみ）さん

東京国立博物館保存修復課保存修復室
アソシエイトフェロー・立体作品担当

プロフィール

- ・岩手県八幡平市生まれ
- ・2004年 東北芸術工科大学大学院 芸術工学研究科 芸術文化専攻 保存修復領域 修了
- ・2006年～2008年 東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター 研究補助員
- ・2011年～2015年 もりおか歴史文化館 学芸員
- ・2015年4月～ 現職

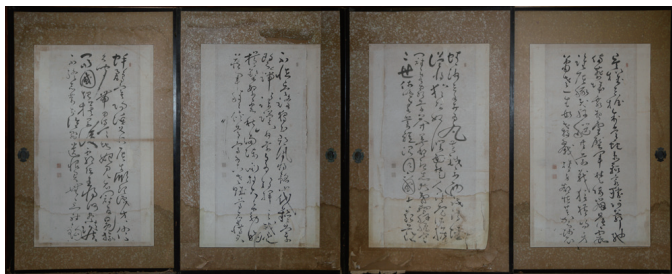
※浄法寺町：岩手県二戸市浄法寺町は、日本の漆の産地として有名。日本で採取される漆の80%は浄法寺町産と言われている。

文化財保存支援機構関西支部と京都造形芸術大学日本庭園・歴史遺産研究センター歴史遺産研究部門と共同で行ってまいりました「東日本大震災被災資料救援活動（通称 ER 事業）」も、はや6年目を迎えました。2014年の報告以降の活動と現状について報告させていただきます。

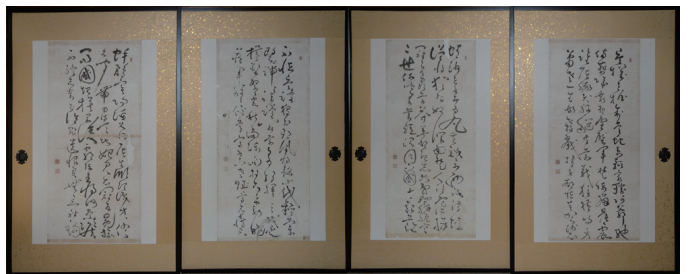
文化財レスキュー事業の一環として、海水を被った被災資料の塩分除去＝水洗処置を続けてきました。近代文書では、紙が酸性紙のような脆弱なものであったり、水で流れるインクが使われていたりして、処置ができないもの、あるいは私信などの個人情報関係のものも相当数ありました。こうした内容のものを仕分けしながら水洗処置を続けて、ようやく、水洗処置を終えることができました。現在、処置が終了したものを綴じ直したり、整理したりする作業を行っています。

文化財レスキューは、所有者が生活を立て直し、被災した資料・作品を保管できるようになるまでの間、預かる事業です。移動したり、保管したりする中で、更に劣化が進んだり他の資料に二次被害を及ぼす可能性のある場合に限って、最小限の処置＝水洗処置を行うという事でした。従って、それ以上の処置、まして

や修理などはそこには含まれません。阪神淡路大震災の後、修復家が個人的に修理を行った記事などを読んで、もっと広く公平に修理ができればよいのにと考えたこともありました。しかし、文化財レスキュー＝行政としては一律公平にできることをするしかなく、修理事業までをその中に入れることは難しいことが分かりました。確かに復興予算の中でそこまでできるケースもありますが、それも何かしらの（付与された県ごとの）ルールや優先順位に基づいて行われるしかありません。したがって、未指定で個人所有のものまではなかなか修理ができないのが現実です。とはいえ、本学では教育の一環として、学生の修理実習という形ならある程度の費用も確保できるという特殊な状況が生まれ、また、東北大学（宮城史料ネット）の援助も得て、お受けした資料・作品の中からいくつかを選んで修理を行うことになりました。とはいえ、実際の作業を大学として単独で行うことは難しく、当機構の登録技術者への一部作業委託（とはいえ、ほとんどボランティアでした）によって、書の襖を仕立て、所有者宅に返却することができました。その経緯や作業の詳細は改めて報告したいと思いますが、今回は写真による紹介のみさせていただきます。



次の間 修復前



次の間 修復後

編集
後記

年2回の発行を目指しているニュースレターですが、27年度も1回の発行で終わってしまいました。今年度は是非あと1回……。新鮮なネタをお待ちしています。(M.Y.)

謝
辞

長崎軍艦島と五島列島教会群を巡るスタディツアー催行に際しましては、国土舘大学岡田保良教授、長崎市総務局世界遺産推進室 川原 直樹様、谷本 祐司様、栗脇 善朗様に大変お世話になりました。記して深謝申し上げます。また、長崎県美術館見学、料亭「花月」のオプションルツアーをセッティングいただきました油彩画保存修復家 竹ノ下磨須子様、美術館にてご案内下さいました学芸員 森園敦先生、油彩画保存修復家 堺智子様に厚く御礼申し上げます。

伏流水シリーズでは、お忙しい中取材に応じて下さいました野中昭美様と、東京国立博物館学芸研究部保存修復課 土屋裕子先生に、改めまして御礼申し上げます。

ご入会ありがとうございました。

(平成 28 年 6 月 1 日現在入会者数)

- 理 事 8 名
- 維持会員 16 名 (役員、評議員含む)
- 登録会員 163 名
- 一般会員 110 名
- 学生会員 53 名
- 監 事 1 名
- 評 議 員 1 名
- 賛助会員 27 件

株式会社 宇佐美松鶴堂
株式会社 宇佐美修徳堂
株式会社 岡墨光堂
株式会社 桂文化財修理工房
有限会社 紙資料修復工房
京都造形芸術大学 日本庭園・歴史遺産研究センター
国富株式会社 長崎営業所
株式会社 芸匠
株式会社 光影堂
有限責任中間法人 国宝修理装こう師連盟
修理工房 宰匠株式会社
株式会社 坂田墨珠堂
株式会社 松鶴堂
株式会社 修美
株式会社 修護
中部資材株式会社
株式会社 東都文化財保存研究所
日本通運株式会社 美術品事業部
株式会社 半田九清堂
長谷川 聡
百元 節
株式会社 フレンドトラベル
株式会社 文化財保存
山領絵画修理工房
合同会社 文化創造巧芸
他 個人 3 名 (アイウエオ順)

NPO JCP の活動に 参加してみませんか？

- 登録会員：年会費 7,000 円
文化財保存に関わる専門的スキルを持ち、プロジェクト遂行に協力する個人。
登録会員は文化財の保存事業を行うための専門家で、文化財に直接関わる専門家とは限りません。
- 一般会員：年会費 5,000 円
この法人の目的に賛同し、支援する団体、個人。
- 学生会員：年会費 3,000 円
大学または大学院に相当もしくは準じる教育機関の学籍を持ち、この法人の目的に賛同して入会する個人。
- 会員特典：季刊情報誌の送付
講演会／研修会等への優先参加

※入会ご希望の方は、ファックス、電話、メールにて申込用紙をご請求ください。折り返し資料をお送りいたします。また、ホームページからでも入会申込ができます。
TEL：03-3821-3264 / FAX：03-3821-3265
E-mail：jimukyoku@jcpnpo.org / URL：www.jcpnpo.org

※現在 JCP では、東日本大震災、熊本地震その他の被災文化財救援募金を受け付けております。ご連絡頂ければ、振込料無料の振込用紙をお送りいたします。
皆様の暖かいご支援を、どうぞよろしくお願い申し上げます。
※この他にも、随時寄附を受け付けております。
下記の郵便振替、あるいは銀行口座をご利用ください。

- ・郵便振替 00120-4-10545
NPOJCP
- ・三菱東京 UFJ 銀行 四谷三丁目支店
普通預金 3960340
特定非営利活動法人 文化財保存支援機構
理事 三輪嘉六
- ・みずほ銀行 根津支店
普通預金 1727893
特定非営利活動法人 文化財保存支援機構

NPO JCP NEWS vol.31

2016 年 7 月 15 日発行



特定非営利活動法人
文化財保存支援機構

〒110-0008

台東区池之端 4-14-8 ビューハイツ池之端 102 号

TEL：03-3821-3264 FAX：03-3821-3265

E-mail：jimukyoku@jcpnpo.org

URL：www.jcpnpo.org

関西支部

京都造形芸術大学 日本庭園・歴史遺産研究センター内

TEL：075-791-8519

〈理 事〉

三輪 嘉六 (理事長)

大林 賢太郎 (副理事長)

西浦 忠輝 (副理事長)

沢田 正昭

本田 光子

増澤 文武

増田 勝彦

三浦 定俊

〈評議員〉

田邊 三郎助

〈本部事務局〉

八木 三香 (事務局長)

松本 洋子

〈関西支部事務局〉

伊達 仁美 (事務局長)